

そろそろ今年も恋愛強化月間に突入である。去年の今ごろは、仕事で沖縄にいたので、名古屋のクリスマスは人生で初めての体験である。自分にとって、この時期が何か特別なイベントがあるわけではないのだが、なぜか子供の頃から街の人がワクワクする感じがとても嬉しくて、心待ちにする時期でもある。この読書感想文も今年最後なので、何にしようかなと思っただが、これからの季節に最も需要？のあるテーマにすることにした。ブームも少し落ち着いたので、今年最後の読書感想文は「世界の中心で、愛をさけぶ」（通称「せかちゅー」）<sup>1</sup>を読んでである。

この小説のあらすじは、一九八〇年代ごろを舞台にした、ある高校生カップルをめぐる恋愛小説である。はじめは、ほのぼのするつきあいから始まるのだが、間もなく彼女が病に倒れ、亡くなってしまふ。その後、一〇数年の年月が流れて、主人公となる彼が、ふとしたきっかけから彼女の記憶が蘇り、それを回顧し、自分の一部として受容するまでを描く作品である。このように書いてしまつと、味も素っ気もないのであるが、この本がブームになったきっかけは少し変わっている。この本を読んだ柴咲コウという女優さんが感動して、雑誌でその感想を述べたことが、そもそのきっかけである。その後、口コミで話題になり、出版後三年経ってベストセラーになった。そしてこの小説を題材にした同名の映画とテレビドラマが製作され、再びブームとなる。しかも小説のストーリーと映画の設定がかなり違ったことも話題となり、いろいろな意味で盛り上がった作品である。ちょうど昨年の五月ごろの話である。

僕は、この本も読んだし、映画も見したが、「えっ、この現代にこのストーリー（驚）」というのが率直な感想だった。僕はちょうど一九八〇年代には高校生だったが、当時この設定やストーリーだと「ダサイ」とか「おしゃれじゃない」と言う評価を受けそうな感じである。しかしいまや「せかちゅー」は「純愛」のシンボルである。バブル景気で、どんなことも「おしゃれじゃないことはダサイ」という感覚を持たされていた時期に、「純愛」というのは絶滅寸前だった。しかしひっそりと生き残っていたのである。絶滅したと思っていた二ホンカワウソ（天然記念物）<sup>2</sup>が、実は近所の川で元気に泳いでいる姿を見かけたぐらいの衝撃だった。

小説と映画化された設定の違いも驚きだった。邦画は、昔から原作に忠実にというのがウリで、いかに想像上の小説の世界を映像化するかに力点が置かれていた。しかし「せかちゅー」の映画化は、かなり大胆に小説の世界を再解釈して、再設定し、映像化している。この映像化の手法も驚きだったが、ただかなり詳細な時代考証が行われており、従来の邦

画とはかなり違ってきたのだという印象を強く受けた作品だった。特に映画の方では、二人のやり取りが、カセットテープを介して行われることにポイントがあり、その記録媒体が一〇数年後も残り、それをリプレイすることで記憶が鮮明に戻るといった設定になっている。なるほどこれは上手い設定だなあというのが正直な感想だった。

僕が中学生から高校生にかけての頃は、ちょうどラジオにテープ録音・再生機能がついたカセットデッキ（ラジカセ）が普及して、カセットテープが安く買えるようになった時期に当たっている。しかもつきあっている二人で交換日記をやっているという話も結構あったし、男の方が恥ずかしがってそれを嫌がり、あまり書かないので、彼女の方が怒るということもよくあった。この時代考証はよく調べたなあと思ったのだが、交換日記としてカセットテープを使って音声でやっていた人はどの位いたのかなあと、ちょっと気にはなった。僕の数少ない記憶のなかでは、カセットテープは、二人の音声交換日記よりも、告白に使うアイテムだったようなことを思い出した。

単純に言えば「好きです。つきあってください。」ということ録音して相手に渡すだけなのだが、当時それがおしゃれな告白方法だと思われていた。というのはラブレターという紙ベースの手紙（メール）を書いて、それを仲介者（メッセンジャー）に託し、その返信（レス）を待つというのが一般的な方法だったからである。電話は、電話代が高かったこともあって、あまり使わなかった。その時に、音声で自分の気持ちを伝えることができるといふ記録媒体カセットテープは、中学高校生恋愛に関する技術革新だった。いまでもそうだと思うが、新しい技術が生まれると、あれこれ想像して工夫して恋愛に活用しようとするものである。ラブレターに代わる告白テープの出現、これが妄想上の世界に生きる中学高校生に夢を与えないはずがない。告白だけでなく、俺編集のベストソング、詩の朗読、はたまたマイソング録音、長い収録時間のテープ価格が安くなる程、いろいろ奇妙なことが起こり始めた。

いまならMDやCD、DVDなどがそうであろう。僕のようなカセットテープ世代では、せいぜい音声だけであったが、静画のみならず動画まで利用できる時代である。すごい時代になったと思うが、もし現代の中学高校生がこれらの保存媒体を利用して告白DVDとか作っていたら、それはそれで驚きである。もしかして今ごろ「せかちゅー」の「助けてください」「バージョンとか、「電車男」「バージョンを考えている人もいるかもしれない」「電車男」は、車内でトラブルに巻き込まれた美女に、ネットの支援を受けながら告白するまを描くノンフィクションである。この作品は、「せかちゅー」とは異なり、ネット上の

書き込みから話題となつて書籍化され、ブームとなつて映画化とテレビドラマ化された作品である。これも一つの「純愛」のあり方らしい。ただこの作品を見て、実は現代の中学高校生の告白の仕方は、自分の思っているものとは全く異なることに気がついた。

最近、電車通勤の毎日であるが、朝早く高校生の通学時間とかち合つてしまった。僕の周りは、男子高校生だらけのむさ苦しいエリアだった。まあいいかと思つて、解けそうだった理論モデルを頭の中で計算していた。周りの男子高校生の話は、気になる子のメールアドレス（メールアドレス）をゲットしたが、コク（告白する）かという相談のような話だった。はあくやっているなあと思つたが、よくある会話の一つなのでさほど気にならず、頭のなかでいろいろ計算していた。そのときである。会話の中で、ある一人が「電車男もがんばったんだから」と言つと、懸案の本人が「そつたな俺もがんばるか」と答えて、携帯をいじり始めたのである。えつ、電車男つてがんばりのシンボルなのか、これは驚いてしまった。せつかく二次微分まで解けていた理論モデルは、このインパクトのおかげですべて頭のなかから吹っ飛んでしまった。

この会話を聞いて、そういえば最近の告白の話思い出した。この頃は、まず気になる子のメアドを入手して、携帯メールを送ることから始まる。告メル（告白メール）を作成して、送信ボタンを押す瞬間に一番勇気がいると言つていた。それで受け取つた方は、気に入らなければウザいメールとして削除する。考えてみると、基本的には指先操作で、気が持ちが処理されてゆく。しかも告白に成功してつきあい始めると、頂いたメールには極力早く返信しなければいけない（即レス）。彼女の誕生日には、日が変わった瞬間にお誕生日メールを送らなければいけない。僕は忘れちゃうんじゃないかと思つて聞いたことがあるのだが、答えは「いや大丈夫です。クロックメール（タイマー設定で送信する機能）にしていますから」ということだった。恋愛も省力化が進んでいる。おそらく今は、手紙にするMDにする何かの媒体を送るといふ感覚はないのである。しかし冷静になつて考えてみると、今の方が良いのではないかと思えてきた。

だいたい媒体を使うということは、それが半永久的に残つてしまう可能性がある。僕の時には、ラブレターからその発展型としてのカセットテープがあつたが、とかく中身は、いっぱいいっぱいの内容である。後になつてまともに見れる代物ではない。おまえがコンビニで見ていた週刊誌のグラビア・アイドルの名前をバラすとか、TUTAYAで借りたビデオのタイトルを知っていると、菊池桃子のコンサートで声援していたことを見ていたと言われても、僕はたいして驚かない。しかしお前の書いたラブレターを持っていると言わ

れたら、これは震え上がってしまう。これほど恥ずかしいものはない。今みたいに送信した告白メールが、アドレス不明で返ってくるか、ウザいメールとして削除される方がマシである。できることなら、セキュリティソフトのウイルスチェックではじかれ、スパムメールとして処理されたいものである（ただ僕に関しては、就職並みに成功率が低かったので、送った媒体が残っている可能性は限りなく小さい。だからあまり心配の必要がない）。そういえば告白テープのカセットづくりのことを思い出した。友達の一人が、「できたよ最高作。聞いてよ。」と一本のカセットテープを持ってきた。タイトルが「ゆ〜こに贈る ALL MY LOVE」。当時、警察のキャッチコピーで「この顔にピンときたらー〇番」というのがあったが、これほどタイトルだけでピンときた物はなかった。これはゼツタイにヤバいと。自作の詩にメロディーをつけて、ギター伴奏で本人が歌っている。聞かされたみんなは、「どつみ」という感想を自信満々に聞かれて、困惑してしまった。みんな遠慮がちに「いいんじゃない」、「成功だよ」、「傑作！」などかなり無責任なことを言っている。正直に言って、僕はこれはもらった人が困るのではないかと思った。というのも本人は歌詞のなかで愛を伝えているつもりなのであるが、一体どつしたいのかがよく分からない。録音の最初に「好きです。つきあってください。」とメッセージを入れるなら分かるが、シヤイなのかテープには歌しか録音していない。しかも遠くでネコが、ギター伴奏に合わせて、ニヤ〜と鳴いている。これではコミックバンドのテープである。「サワノ、おまえは」と聞かれて焦った僕は、思わず「感動。これまでにない感動。」と言ってしまった。ひどいものである。

女子のことは分からないが、男子の中学高校生の妄想はとんでもないものである。ある朝であったが、ある友達が頬を紅潮させながら「新しい理論発見。大発見！」と言いながら教室に入ってきた。何かと思った僕は、そいつに話を急かした。それはこんな話だった。彼は電車通学だったのだが、車内に気になる子がいて、その子がワイヤレス・ウォークマン（本体から電波を飛ばし、イヤホン部分で受信する仕組みで、本体とイヤホンを切り離れたウォークマン）を使っていることを発見した。彼の考案した理論は、自分もワイヤレス・ウォークマンを買って、告白テープを自分のウォークマンで流せば、その子が聞いてくれて、こんなおしゃれな方法で大成功！ということであった。そいつは「俺の理論、真似するなよ」と言い張っていたが、その場にいたみんなは「誰が真似するか、バカ」というつつこみで揃ってしまった。まるで映画の一場面のようであった。

「世界の中心で、愛をさけぶ」、本を読んで、映画を見て、ネット上の話題を見て、自

分も大沢たかお（映画の主演者である）のように、実家にあるカセットテープを見てみたくなった。もちろん長澤まさみちゃんのような可愛い子から貰った「いまを生きて！」というメッセージが残されているテープなどない。出てきたテープは、「疑惑」サワノのテーマ」というタイトルである。これは中学生の頃に、ガクさんから貰ったテープである。いま風に言えば、サワノの疑惑にインスパイヤー（触発）され、そのイメージをサンプリング構成（楽曲の一部を使って編集作業すること）して、いまのサワノをセレブ（祝福）したものである。

家にはテープを再生するラジカセなどない。そう言えば、高校の頃に使っていたカセットテープ用のウォークマンがどっかにあったなと思って、押入れの中にあるダンボールをゴソゴソ探し始めた。ありゃ、イヤホンがダメになっている。いま持っているネットワー・ク・ウォークマンので使えるかなと思って見ると、ジャックが同じなので使えそうである。動くかなあと思ったが、ウォークマンのバッテリーが切れている。しかも充電器がない。はあ、じゃあ電池でやるかと思ったら、今度は手元に単三電池などない。もう、手間がかかる、少しイライラしながら、近所のコンビニまで電池を買いに行った。目当ての電池をコンビニ棚で探していると、その傍にMDなどの保存媒体が陳列されていた。今はコンビニでもいろいろな媒体を扱うんだなあ、でもカセットテープはないんだなとふと寂しくなった。

テープ再生に、これだけ手間隙かかるとは思わなかった。テープの録音時間は十分もない。それなのにもう半日近くかかっている。一〇数年も経ち、テープの質も劣化しているので、聞きにくいかなと思ったのだが、非常にクリアなまま音質を保っている。ゆっくりとテープを再生するウォークマンは、少し軋みながらテープを回してゆく。録音された内容、それは可笑しすぎたはずだった。恥ずかしいはずだった。くだらないはずだった。しかしプレイバックから流れてくるのは、ただ中学生そのものの自分、ただそれだけしか聞き取ることができなかった。

（片山恭一『世界の中心で、愛をさげぶ』小学館、二〇〇一年）